

大人用



伝道地便り

2020年 第3期 西中央アフリカ支部

第1話「リベリアのための学校」	リベリア
第2話「聖書の文字を読むのが簡単に」	リベリア
第3話「祈りに救われた結婚」	ガボン
第4話「祈りと迫害」	ギニア
第5話「不思議な夢と女の子」	ギニア
第6話「ついに手にした自由」	ギニア

ADVENTIST
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの用い方のヒント

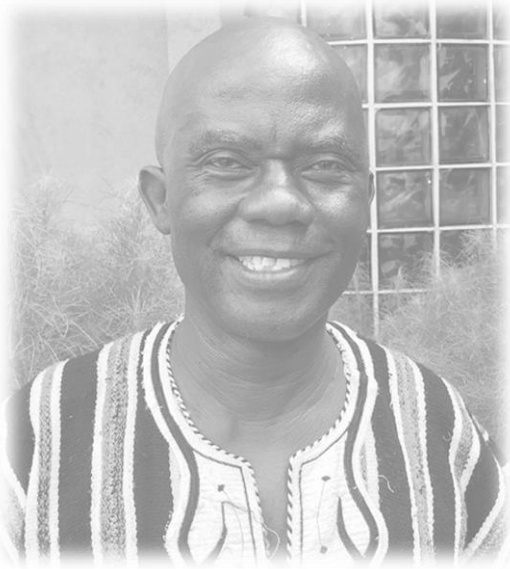
伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列举いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

1. リベリアのための学校

リベリア



B. ダーリントン・ティア 58 歳

B.ダーリントン・ティアは幼い頃から教会に通っていました。父親は執事、そして母親はいつも病気の教会員のために祈っていました。

母親はとても熱心な教会員でしたが、父親はそこまで献身的ではありませんでした。彼は秘密結社と繋がりがあり、ダーリントンが7歳の時、そのグループに参加するよう誘いました。

「息子よ、お前の曾祖父さんや他の先祖たちも参加していたのだよ。私が死んだ時、私に代わるようにお前も参加しなさい」

しかしダーリントンはその秘密結社に参加する気はありませんでした。そのグループの参加者たちが、亡くなった先祖たちをリベリアの山奥で崇拝していることを知っていたのです。父親は度々、村から4時間もかけて山に行き、先祖たちに犠牲をささげて祈っていました。作物を栽培する時期になると、「ああご先祖さま、私たちの農園で栽培が始まりますので、豊作を祈るためにこうしてやって参りました」と父親は祈りました。母親が妊

娠すると、「ああご先祖さま、娘が生まれますのであなたの元に来ました」と祈り、村で病気が流行ると「ああご先祖さま、私たちの村で病気が流行っていますのでやって参りました」と祈りました。

父親は毎回、鶏肉と白米を乗せた皿を先祖にささげました。そしてその鶏肉と皿を地面に置くと、一度家に帰るのです。しばらくして皿を取りに戻り、食べ物が無くなっているのを見て、先祖たちが祈りを受け入れた、と信じたのです。

ダーリントンにはこの秘密結社への参加について、選択肢がありませんでした。「はい」も「いいえ」も言えなかったのです。しかし母親にはそれと言う権利があり、きっぱりと断ったのです。父親が山に行く準備をしていると必ず母親は息子を違う村に連れて行きました。そして「彼にはクリスチャンになってほしい」と父親に告げたのです。

ダーリントンは毎週日曜学校に参加していましたが、聖書を理解していませんでした。青年になった時、セブンスデー・アドベンチストの伝道師が村に来て、第七日目の安息日について語りました。ダーリントンは聖書に書かれている安息日について初めて読み、日曜教会の牧師に、正しい日は土曜日なのか日曜日なのか説明をしてほしいと尋ねました。しかしその牧師には日曜礼拝を裏付ける聖句を示すことはできませんでした。

「君、第7日目は安息日だ」と牧師は言いました。

「私たちはキリストの復活を覚えて日曜日に礼拝をしているのだよ」

ダーリントンは聖書に従いたかったので、バプテスマを受け、アドベンチストの教会員となりました。父親はこの決断を快く思いませんでした。なぜならそれは、二度と先祖を崇拝することはない、ということを示していたからです。母親は息

子が神さまを愛する人となったことを喜びました。

ダーリントンは牧師になりたいと強く思い、常に祈っていました。リベリアにはアドベンチストの神学校が無く、牧師になるためにはガーナかナイジェリアまで行って神学を学ぶ必要がありました。両親に彼を助けるお金が無いことは分かっていたので、彼は学費を稼ぐためにたくさん働きました。その後内戦によって彼の努力は阻害され、1990年代には政界に入ることとなり、国会議員に選出されたのでした。

彼は考えました。「ぼくは外国で神学を学ぶためのお金を貯めることができないとしても、リベリアにアドベンチストの神学校を作って、若者たちが国内で学べるようにすることはできるのではないだろうか」

選挙で選出されてから1年経つと、リベリアの首都モンロビアに西アフリカアドベンチスト大学を設立する議案を提出しました。国会で6年過ごした後、秘密結社に参加することと賄賂を受け取るよう、強い圧力を受け、国会を去る事になりました。そして彼は西アフリカアドベンチスト大学の神学科に入学したのです。

現在ダーリントンは牧師となり、東南リベリア地区の長をしています。今期の13回献金の一部は、東南リベリアのブキャナンでの小学校建設資金として用いられます。

「主のご再臨に人々を備えさせるという、主のための働きにわたしを用いてくださった主に、とても感謝しています」とダーリントンは言います。

リベリアの内戦によって破壊されてしまった学校に代わり、ブキャナンでの小学校建設が計画されています。皆さまの惜しみない13回献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- bit.ly/Darlington-Teah にて Youtube でダーリントンについて視聴できます。
- 写真は以下からダウンロードできます：
Facebook(bit.ly/fb-mq) または、ADAMS databank(bit.ly/school-for-liberia)。
- 13回安息日プロジェクトの写真は以下よりダウンロードできます：bit.ly/WAD-202013th-projects からダウンロードできます。

宣教メモ

- 1889年10月24日の世界総会日報に「リベリア出身のギャストン兄弟は、最近真実を見出した後、同じ民族の中に貴重な真実の種を蒔くために母国に帰国した」と記されています。彼の1892年の西アフリカ訪問についての報告が1893年の世界総会であり、ローレンス・C・チャドウィックが「ギャストン兄弟の家またはその周辺」(GC 日報5: 2、1/29、1893)に伝道本部を開くため、宣教師を送ろうとの呼びかけをしました。しかしながらリベリアは最初の公式のアドベンチストの宣教師をその後33年も待たなければなりませんでした。
- 1930年4月30日、4名の改宗者がセアンにてリベリア初となるバプテスマを受けました。その中の1人がウィリー・ヘルビッグ、後にリベリアの初代按手礼牧師となりました。
- リベリアの人口の約85.5%はキリスト教徒、そして12.2%がイスラム教徒で、主にスンニ派とシーア派、少数派のアフマディーヤがいます。

2. 聖書の文字を読むのが簡単に リベリア



S.E. ジョー・シーヤ 66 歳

ジョー・コニョン・シーヤは文字を読むことができませんでした。彼の住むシーヤというリベリアの村には学校が無かったのです。幼い頃から家族の持つ農園で働き、大人になり結婚をし、9人の子どもを持ち、その後もずっと農園で働いていたため、文字を読む機会もありませんでした。

ある日、セブンスデー・アドベンチストの伝道師、ウィリー・ヘルビグが村にやってきました。ジョーは聖書の学びに興味があり、他の村人と共にその伝道師に学びたいと申し出ました。そしてウィリーと聖書を学んで1か月が経つと、シーヤとその隣村のデーユに住む50人の成人全員がバプテスマを受けたのです。

リベリアで初めてのアドベンチスト按手礼牧師であるウィリーはこの新しい教会員たちに、「今度はあなたが福音のメッセージを述べ伝える番です」と伝えました。ジョーの頭は真っ白になりました。彼はイエスさまを愛していましたし、福音を分かち合いたいという思いはあったものの、45歳にして文字を読むこともできなかったのです。

「私には聖書を開いて教えるなどできません」と彼は言いました。

一方、ウィリーは心配していませんでした。彼はジョーの他、5人の新しい教会員たちに、デーユにある信徒伝道師養成コースに参加するよう誘いました。授業初日、ジョーはウィリーのクラスに参加する他の5人に会いました。彼らは皆学校に行ったことがなく、文字を読むことができなかったのです。彼にとって良き仲間たちでした。

ウィリーはお祈りをすると、新しい聖書を1人1冊ずつ配りました。そして自分の聖書を開き、彼らに重要な聖句の探し方を教えました。聖句をひとつずつ声に出して読み、一語一語意味を説明していきました。

ジョーは真剣に祈りました。それら全ての聖句を覚えるなど、彼にとっては想像も付かないことでした。イエスさまがすぐそこまでいらしていることを他の人に伝えたい。けれども、どうしたらそれができるか分からなかったのです。

ジョーとその5人は、毎日ウィリーと聖書の学びを続けました。そしてジョーは、クラスメートたちが聖霊によって祝福されるよう毎日祈りました。

ある日、ウィリーが聖書の重要な箇所を彼らに教えている時、ジョーはふと助けなしに聖句を見つけれられていることに気が付きました。そしてウィリーが読むと、ジョーも続いて自分で読むことができたのです。ジョーがクラスメートたちを見ると、彼らも聖句を自分で開き、読むことができるようになっていました。ジョーとクラスメートたちは立ち上がり、驚いた様子の伝道師に、声を出して聖書を読んで聞かせたのでした。

ジョーは家に帰ると、聖書以外の本を読もうとしましたが、一語も理解できませんでした。もう1つ本を見つけて読もうとしましたが、やはり読めません。しかし聖書は簡単に読むことができた

のです。

ジョーはその後、1937年にシーヤとその他いくつかの村々のために設立された初代セブンスデー・アドベンチスト教会の長老となりました。彼は一度も学校に行ったことがなかったにも関わらず、ニューセスという村にできた新しい教会でも熱心に聖書を教え、伝道しました。2003年、ジョーは90歳で亡くなりました。

「あれは本当に聖霊の業でした」と教会長老である66歳の息子、S.E.ジョー・シーヤは言います。

「神さまはセブンスデー・アドベンチストのメッセージが私たちの地域にも伝わるように、聖霊によって私の父に知識をお与えになり、父は聖書を読めるようになったのです」

今期の13回献金の一部は、数年前リベリアの内戦により破壊されてしまった学校に代わり、シーヤの村近くにあるブキャナンで計画されている小学校建設費用として用いられます。

〈お話のヒント〉

- ・シーヤという村の名前は、ジョーの家族に由来しています。
- ・bit.ly/Joe-Seeyah. にて Youtube でジョーについて視聴できます。
- ・写真は以下からダウンロードできます：
Facebook(bit.ly/fb-mq) または、ADAMS databank(bit.ly/reading-made-easy).
- ・13回安息日プロジェクトの写真は以下よりダウンロードできます：bit.ly/WAD-2020

豆知識

- ・アメリカ植民地協会は、1816年にアメリカ合衆国に設立されたグループで、自由アフリカ系アメリカ人（法的に奴隷でない）の、西アフリカの植民地への移住をサポートしリベリア設立に貢献しました。この協会の協会員は、奴隷制度に反対した宗教や政治のグループと自由黒人が奴隷所有システムの安定に対する脅威であると考えた奴隷所有者たちでした。
- ・リベリアは細かな装飾のあるお面や、人面の木彫り、木彫りのアクセサリー、特にくし、スプーンやフォークなどで知られています。リベリアの木の彫刻は、主に古代の歴史、民間伝承、ことわざ、スピリチュアリティや地方の暮らしなどに影響を受けて作られており、アーティストと彫り描かれている人々やモノとのつながり、詳細にいたるまでの意識を感じさせます。
- ・リベリアの食文化はアメリカとの様々なつながり、貿易、植民地時代の影響を受けており、特にアメリカの南の地方の食文化と元来の西アフリカの食文化が混ざり合っています。主食は主に米やその他のでんぷん、トロピカルフルーツ、野菜、そして地元で捕れる魚や肉です。またリベリアでは西アフリカには珍しく、アメリカからの帰国者が持ち込んだパンを焼くという文化も見られます。

3. 祈りに救われた結婚

ガボン



アンジェリーク・アビーム 45 歳

アンジェリーク・アビームは 15 歳のとき、ピーターと恋に落ちました。彼はそのとき 20 歳でした。2 人は、ガボン北部の都市オエムで一緒に住み始め、2 人の娘をもうけました。ピーターはお酒を飲み、たばこも吸い、生活は苦しかったのですが、アンジェリークは彼を愛していました。

アンジェリークが 25 歳のとき、近くに住むセブンスデー・アドベンチストの教会員から伝道講演会への誘いを受けました。第 7 日目が安息日であるという教えに彼女はたくさんの疑問を抱き、その講演会の講師の説明にも満足することができませんでした。

2 週間ある講演会の最後の金曜日、講師は彼女に、「あなたの教会の牧師に安息日について質問してみたらどうか」と提案しました。彼女はそうすることを心に決めました。

その夜、アンジェリークは帰り道でばったり自分の教会の牧師に会いました。

「牧師先生、本当の安息日は日曜日ですか？それとも土曜日ですか？」と彼女は聞きました。「アドベンチスト教会は、聖書によると安息日は

土曜日だと言っています」

牧師は彼女に反論することはなく、「土曜日についてあなたが聞いたことは真実です。あなたは真実を学んだのです。アドベンチスト教会に行ってみなさい」と言いました。

アンジェリークがバプテスマを受けたあと、彼女の人生は、よりいっそう複雑なものになりました。彼女はピーターに結婚を申し出ましたが、彼はそれを受け入れませんでした。彼女が彼に家を出るように言うと、彼はポール・ジャンティルという 250 マイル（400 キロ）南に離れた都市に移り住んだのでした。アンジェリークは毎朝、毎晩、ピーターがイエスさまを知るよう祈りました。

「主よ、あなたはわたしに真実を知らせてくださいました。どうか同じようにピーターにも真実を知る機会をお与えください」。彼女は聖書研究の資料もピーターに送っていました。

そんなあるとき、ポール・ジャンティルでピーターの身に問題が起きました。彼は雇い主に窃盗のぬれぎぬを着せられ、無罪を主張したにもかかわらず、3 か月のあいだ投獄されることになってしまったのです。刑務所で彼はたくさん考える時間がありました。何もすることがなかったので、アドベンチストのチャプレンが彼を聖書研究に誘うと、いつでも参加しました。釈放される少し前、彼はバプテスマを受けました。

アンジェリークは友だちからピーターが刑務所にいるということは聞いていましたが、聖書研究については何も知りませんでした。彼女は毎朝毎晩、祈り続けていました。

「主よ、あなたはわたしに真実を知らせてくださいました。どうか同じようにピーターにも真実を知る機会をお与えください」と、彼女は祈っていました。

ピーターは釈放後、自分の新しい信仰について、アンジェリークに電話で伝えました。

「今なら、あのとき君がなぜぼくに家を出るように言ったのかが理解できるよ」と言いました。

「アドベンチストになれてとても嬉しいんだ」

アンジェリークは喜びで満たされました。彼女はピーターをずっと愛していたからです。彼女の毎日の祈りは、「ピーターの信仰の実が彼の生活に表されるように」という祈りに変わりました。彼女は彼にお酒とたばこをやめてほしかったのです。

ピーターはアンジェリークと娘たちのようすを聞くためにいつも電話をかけてきました。ある日の電話でアンジェリークは、ポール・ジャンティルで開かれるパスファインダーのキャンポリーに、下の娘を1週間連れて行くとピーターに伝えました。ピーターとアンジェリークはそのキャンポリーで再会することを約束しました。別居をしてから6年の月日が経っていました。

キャンポリーでピーターは、とびきりの笑顔と優しい抱擁でアンジェリークに挨拶をしました。2人は2時間の温かい会話のときを楽しみ、ピーターは帰って行きました。アンジェリークはピーターの人生が本当に変化していることを感じました。ピーターはお酒もたばこも止め、雰囲気も優しくなっていました。

ピーターはキャンポリーのあいだ、話をするために何度もやってきました。キャンポリー終了後、アンジェリークはポール・ジャンティルに1週間残り、ピーターと話し合いをすることにしました。ピーターがプロポーズをしたのはそのときでした。彼は言いました。

「愛しているよ。君に会えなくてとても寂しいんだ。結婚してほしい」

「そうね、結婚しましょう！」アンジェリークは喜んでそう答えました。

これが8年前のことです。現在ピーターはガボンの首都リーブルヴィルの教会で長老として奉仕しており、イエスさまを心から愛しています。アンジェリークにとってこれ以上の幸せはありません。

彼女にとっての暗黒の時期、彼女はマタイ6章33節に希望を見出していました。この聖句でイエスさまは、「何よりもまず、神の国と神の義を求め

なさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」と仰っています。

「わたしたちの一番のゴールは神の国を求めることであるべきです」とアンジェリークは言います。「もしあなたは信仰を持っているけれども、あなたの夫、または妻がそうでないならば、祈り続けてください。なぜなら、神さまは心に奇跡を起こすことができるからです。6年ののち、神さまはわたしの祈りに応えてくださいました」

3年前、13回献金の一部が、アンジェリークの故郷ガボンのリーブルヴィルにある280人の生徒を持つ高校を建設する資金として用いられました。今期の13回献金は、アフリカの2つの国、ギニアとリベリアでの学校建設資金として用いられます。皆さまの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- Angelique はアンジェリークと発音します。
- bit.ly/Angelique-Abeme. にて Youtube でアンジェリークについて視聴できます。
- 写真は以下からダウンロードできます：
Facebook(bit.ly/fb-mq) または、ADAMS databank(bit.ly/prayer-saves-marriage).
- 13回安息日プロジェクトの写真は以下よりダウンロードできます：bit.ly/WAD-2020

宣教メモ

- ガボン・ミッションは1975年に設立され、1978年に組織化されました。本部は首都のリーブルヴィルにあります。
- アドベンチスト教会は、1981年にガボン政府より公式に認められました。
- ガボンの人口の約73%はキリスト教で、少なくとも何らかのキリスト教習慣を信仰の表れとして実行しています。12%はイスラム教、10%は伝統的なその土地の宗教を信仰していて、5%は無宗教、または無神論者です。

4. 祈りと迫害

ギニア



マイムーナ・バンゴラ 29 歳

あるとき、ギニアの首都コナクリにある自宅の玄関先にセブンスデー・アドベンチストの教会員がやって来て、わたしと夫は彼とそこで数分話をしました。

彼はわたしにパンフレットを手渡そうとしましたが、わたしは端のほうに小さく書かれた「ジーザス」という文字を目にし、パンフレットには手も触れずに、主人のアルファに渡すように彼に言いました。

パンフレットはフランス語で書かれていて、アルファはフランス語が読めないため、わたしの手に押し付けてきて、「これを読んでくれ」と言いました。

わたしはそのパンフレットを床に落とすと、「わたしはクリスチャンじゃないのよ！ こんなもの触りたくもない」と言いました。キリスト教のことなど聞きたくありませんでしたので玄関のドアを開け、中に入りました。またその時間はわたしの毎夕の祈りの時間だったのです。しかしわたしは祈ることができませんでした。玄関の外でアドベンチストの訪問者がわたしの夫と話をしている

声が聞こえて、祈りに集中できず、わたしはとても苛立っていました。彼はアルファに、何か祈りのリクエストがあるかと聞きました。

「仕事が必要なのです」と電気工をしているアルファは言いました。「それに、お金を稼いでもすぐに無くなってしまいます。妻は妊娠中で様々な問題もあるし、彼女のためにも祈ってください」

この会話を聞いていたわたしは外に出て行き、わたしの夫ですら知らないことをそのアドベンチストに言いました。前回病院に健診で行ったとき、医者にわたしの赤ちゃんはもう生きていませんと言われたのです。赤ちゃんはわたしのお腹の中で死んでしまったのです。

主人はこのニュースを聞くとショックを受けていました。「わたしのために祈ってください」とわたしはそのアドベンチストに頼みました。彼は、「主よ、もしみ心ならば彼女に赤ちゃんをお与えください。しかしみ心でないのなら、み心の通りになりますように」と祈りました。

祈りが終わると、彼は落ちていたパンフレットを拾い、彼の名前「トランキール・ファシナドゥノ」と携帯の番号をそこに書き、アルファに手渡しながら優しく言いました。「もしかすると、あなたの奥さんがこれを取っておいていつの日かあなたに読んでくれるかもしれませんよ」

彼が去るとすぐにわたしはそのパンフレットを破り捨てました。彼の祈りは良かったけれど、キリスト教に1ミリも興味はありませんでした。

その夜、わたしは過去数か月で一番良く眠ることができました。そして痛みも出血も治まってきました。そのあと病院に行くと、医者のお誤診だったことが分かりました。そもそもわたしは妊娠すらしていなかったのです。

すると今度はわたしの下の息子のアンソニーが病気にかかりました。病院で薬を買いましたが、何も効きません。そのとき、トランキールが祈っ

たあとにわたしの具合がよくなったことを思い出しました。「なぜ彼の番号が書かれたパンフレットを捨ててしまったんだろう」わたしは自分を責めました。次の日、電話番号のことを考えていると、ドアをノックする音が聞こえました。そこにいたのはトランキールだったのです。

わたしは泣きながら、「来てくれて本当に嬉しい！」と言いました。

「あなたに電話をしたいと思っていました。どうかわたしの病気の息子のために祈ってください」と伝え、トランキールは祈り、その日の午後に息子は回復しました。

アルファとわたしはこの出来事に感激しましたが、わたしはやはり教会には行きたくありませんでした。しかし、トランキールの祈りを何度も思い出し、1か月経ったあと、教会に行くことにしました。そのときの礼拝に深く感動し、毎週安息日には教会に行くことにしました。

一方アルファは2回安息日に教会に行っただけでした。友だちに、正気を失うと警告され、行くのを止めてしまったのです。アルファはわたしにも教会に行くなと言いましたが、彼に黙ってわたしは教会に行っていました。しばらく経ち、毎安息日にわたしが出かけることに彼は気が付きました。また友だちが、わたしが教会に入るのを見たとき彼に伝え、アルファはわたしに暴力をふるうようになりました。暴力がひどすぎて病院に行かなければならなかったことも一度ありました。

しかしわたしは教会に通い続け、安息日学校でより良い生きかたを学びました。トランキールはグローバルミッションの宣教師だということが分かり、彼が聖書研究をしてくれました。十戒の第7日目の安息日について読んだあと、クリスチャンになる決心がつけました。

アルファは今でも私に暴力をふるいます。わたしが口を開こうとすると、平手打ちをして話すのを拒絶するのです。わたしたちは同じ部屋で寝ることもありませんし、息子たちの養育も拒否しています。わたしは彼のために毎日祈っています。

わたしの一番好きな聖句のひとつはヨハネ 14章1節で、イエス様は「心を騒がせるな。神を信

じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」と仰っています。

迫害に関わらず、わたしの心にはキリストによる平安があります。皆さん、わたしのために祈ってください。主と共にいる限り、わたしたちは勝利を得ています。わたしの夫はいつの日かクリスチャンになるでしょう。

今期の13回献金の一部は、マイムーナの息子たちやその他の子どもたちが学ぶギニアのコナクリにあるコバヤ・アカデミーの学校建設資金として用いられます。マイムーナやギニアのアドベンチストの働きを皆様のお祈りに覚えてくださることを感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- あなたの周りの女性1人にこの証をシェアする呼びかけをしましょう。
- **Maimouna** はマイムーナと発音します。
- **Tranquelle** はトランキールと発音します。
- トランキール側から語るこのストーリーも書かれています。(英語版の『YOUTH & ADLUT MISSION』に入っています)。
- bit.ly/Maimouna-Bangoura. にて Youtube でマイムーナについて視聴できます。
- 写真は以下からダウンロードできます：
Facebook(bit.ly/fb-mq) または、ADAMS databank(bit.ly/prayer-and-persecution).
- 13回安息日プロジェクトの写真は以下よりダウンロードできます：bit.ly/WAD-2020

宣教メモ

- ギニアでの働きは1987年に、ヨーロッパから来た教会員夫婦の信仰の証から静かに始まりました。1992年の4月、最初の戦争難民がリベリアからギニアに到着し、その中にはセブンスデー・アドベンチストや牧師の資格を持つ W.Oloysius (W.オロイシウス) も含まれており、彼らはすぐに信仰の証を始めたのでした。

5. 不思議な夢と女の子

ギニア



マリア 29 歳

マリアは2歳のころから母親についてまじない師のところに通っていました。家族の持つ会社がギニアで成功するように祝福をいただくためでした。

このような訪問は生活の一部で、いただく祝福も効果があるようでした。母親は裕福な女性実業家となり、西アフリカ中にたくさんのお店を持ち、自分の娘も裕福にしました。娘のマリアは安全なゲートつきコミュニティの中に家を持ち、車を2台所有し、ギニアの首都コナクリにおしゃれな洋服やハンドバッグを売る大きな店を持っていました。

しかし2013年、マリアが24歳のとき、祝福を受けるためにまじない師を訪れると、非常に驚く出来事がありました。

「もしあなたが裕福でいたいのなら、人間のいけにえを献げなければならない。そのいけにえはアルビノ（生まれつき白い人）でなければならない」と言われたのです。

マリアは牛をいけにえとして呪術医に献げたことはありましたが、人間をいけにえにしたことな

どももちろんありません。「人間のいけにえ」という考えで彼女は怖くなり、その夜寝るときもそのことが頭を離れませんでした。眠りにつくと、彼女の夢の中で2人の幼い子どもが彼女に話しかけてきたのですが、何を言っているか分かりませんでした。

次の日の夜、彼女は同じ子どもたちの夢を見ました。しかし今度は話していることが分かったのです。

「解決法はうらない師に通うことではないよ」と1人の子どもが言いました。

次の日の夜、マリアはまた夢を見ました。今度は彼女が道を歩いていると声が聞こえてきました。その声は、「解決法は、わたしたちの天の父と、救い主イエス・キリストです」と言いました。

彼女は起きて「なぜイエス・キリストが解決法なの？」と、不思議に思いました。彼女はクリスチャンではないし、別の宗教に属していたからです。

彼女は母親に、ここ3日連続で見た夢の話をしました。

「なぜ人間のいけにえなど献げないといけいないの？」と彼女は言いました。

母親はその夢について嫌悪感を示し、いけにえには牛を買って献げるようにマリアに言いました。そしてマリアはその通りにしました。そのまじない師は牛を殺す準備をしながら、彼女にもう夢を見なくなるだろうと保証しました。しかしその夜、マリアはまた夢を見たのです。

その週の週末、マリアは毎晩見る夢に疲れ果て、買い物に繰り出すことにしました。土曜日の朝、フェンスで囲まれた敷地の出口まで車を走らせ、門が開くのを待っていると、小さな女の子が突然敷地に入ってきて車の窓に近づいて来ました。「教会に行きませんか？」と女の子は尋ねてきました。

マリアは驚いて、「わたしはクリスチャンじゃな

いのよ。なぜ教会に行かないかとわたしに聞いたのかしら？ だれかを探しているの？」と女の子に聞きました。

女の子は「教会に行きたいの」と言うのです。マリアはその女の子を見て、もしかするとこの子は迷子で親を探しているのかもしれないと思いました。しかし近所に教会があるのかさえも分かりません。

すると女の子は、マリアの考えていることが分かったのか、「行き方なら分かります」と言いました。

マリアは教会を探すのを助けることにして車を降りました。少し歩くと、マリアと女の子はギニアのセブンスデー・アドベンチスト本部のゲートに到着しました。ゲートの中では教会の建物のそばに数人の人たちが立っていました。そのうちの1人の女性がマリアに、「何かお手伝いすることがありますか？」と尋ねてきました。

「この女の子がここに来たいと言うので来たのですけど……」とマリアが女の子の方を指さそうとすると、どこにも女の子がいません。マリアはゲートの外を見に行き、またゲートの中も探しましたが見当たりません。対応してくれていた親切な女性の心配そうなまなざしを見てみると、彼女は突然その女性に夢の話をしたいと強く思いました。

「質問してもいいですか？」と尋ねました。

「もちろんです」とその女性は言いました。

「最近たくさんの夢を見るんです。牛をいけにえに献げたりしたのですが、夢を見ないようにすることはできませんでした。どうしたら良いか分からないのです」

すると女性は、「少しお待ちくださいね。わたしの主人は牧師なので、彼に助けを求めますからね」と答えました。

これが、たくさんの人々がキリスト教を嫌う国でノンクリスチャンであったマリアがイエスさまについて学ぶこととなった経緯です。現在、彼女は心からイエスさまを愛するクリスチャンです。

「わたしのキリスト教への改宗は奇跡です。だれもわたしの元へ聖書を持って来たわけでもない

し、キリスト教の本を読んだわけでもありません。神さまがわたしをお呼びになられたのです」

マリアがその女の子を見ることは二度とありませんでした。彼女は、女の子は天使だったと確信しています。

ギニアのクリスチャンは人口のたった7パーセントで、多くの人はキリスト教に嫌悪感を抱いているため、セブンスデー・アドベンチスト教会のギニアでの伝道活動は非常に厳しい状況にあります。今期の13回献金の一部はギニアの首都コナクリにあるコバヤ・アカデミーの建設資金として用いられます。この学校を通してノンクリスチャン家庭から来るたくさんの子どもたちにイエスさまの愛を教えることができるでしょう。

〈お話のヒント〉

- ・アドベンチスト・ミッションは、マリアの安全を守るため、本名を公表していません。写真は彼女本人です。
- ・次の話で、マリアについてより詳しくお読みください。
- ・写真は以下からダウンロードできます：
Facebook(bit.ly/fb-mq) または、ADAMS databank(bit.ly/maria-in-guinea).
- ・13回安息日プロジェクトの写真は以下よりダウンロードできます：bit.ly/WAD-2020
- ・ギニアの平均寿命は56歳です。
- ・ギニア人の大半、75%が農業で生計を立てています。

6. ついに手にした自由

ギニア



マリア 29 歳

キリストを捨てさせることに失敗したマリアの母親は、自分でかたを付けることにしました。レストランでマリアの飲み物に睡眠薬を入れ、マリアの妹の手を借りて意識のない娘を車に運び、自宅のあるギニアの村へと運びました。マリアの5歳の息子、マークもいっしょでした。

母親は裕福な女性実業家で、家族の住む敷地には高層マンションに豪華なゲストハウス、その他複数の建物がありました。敷地は背の高いフェンスで囲まれており、警備員が常に出入り口の門で見張っていました。マリアは寝室に閉じ込められました。

母親には極めて非道な計画がありました。彼女はナイジェリアから呪術師を雇い、イエスさまに対するマリアの考えを変えようとしたのです。マリアは呪術師を見ると、「たとえあなたがわたしを殺したとしてもわたしがイエスさまを否定することは決してないわ」と言いました。「わたしはたとえ教会に行けなくてもイエスさまを礼拝する。イエスさまはどこにでもおられるのよ」

呪術師は薄笑いを浮かべ、こう言いました。「あなたの母親はあなたを何度も殺そうとしたが殺せなかったとわたしに言ってきた。だが教えてあげよう。わたしはイエスさまとやらよりももっと力のあるものを持っているのだよ」

彼は奇妙な粉を水に混ぜ、マリアに無理矢理飲ませました。そしてそのあと、奇妙なローションをマリアの体に塗り言いました。「イエスを否定しろ。しなければ死ぬ」

マリアは「わたしは決してイエスさまを否定しない」と拒否しました。

母親は呪術師を手伝い、ある日奇妙な粉をマリアの顔に塗りました。するとマリアの皮膚はただれ、次の日いたる所から出血し始めました。

マリアの息子、マークは自分のお母さんにいったい何が起きているのか理解ができませんでした。お母さんのただれた顔を見たとき、彼は涙を流しました。しかし、毎晩寝る前にお母さんと祈っていたことを思い出して、マリアの妹のハジャにいっしょに祈ってほしいと頼み込みました。ハジャは母親が近くにいないことを確認すると、いっしょに祈ってくれました。

マークは「イエスさま。どうかお母さんを助けてください」と祈りました。「お母さんが良くなるように助けてください」

7か月が過ぎました。マリアは衰弱し、動くことすら困難になりました。彼女の体からは腐ったような異臭がただよっていました。ハジャは怖くなり、マリアのアドベンチストの友人のひとりに電話をかけて言いました。

「マリアが死んでしまいます。どうか祈ってください」

その友人はマリアと話したいと言いましたが、衰弱し過ぎて話せる状態ではないことをハジャは説明しました。彼女はマリアの写真を携帯で撮り、

送信しました。アドベンチストの友人はそれを見て涙を流しました。「あなたのお母さんが彼女を殺そうとしているということが分かりました。教会員全員に祈ってもらうよう伝えます」と言いました。

ギニア中の教会員たちがマリアのために祈りました。数日後、そのアドベンチストの友人はハジャに電話をしました。

「マリアがあまり動けない状態なのは分かっているけれども、彼女を脱出させる手助けをしてもらえませんか？ お金を送ります」と彼は言いました。

ハジャは協力を約束しました。その友人は、ギニアのセブンスデー・アドベンチスト教会総理であるジェイコブ・グボーリーに連絡をし、首都コナクリまでの車代を送ってもらいました。

ハジャは金曜日の朝、母親が仕事でいない時間を狙いました。呪術師が用事で家を出た隙に、ハジャは警備員に売店で買い物をするように頼んだのです。敷地の門を開け、彼女は通りすがりの車を呼び止め、運転手にマリアとマークをコナクリにある教会本部まで送って欲しいとお金を渡しました。

マリアとマークの移動中、教会本部では小さな騒ぎがありました。教会の警備員が、正門にあるマンゴーの木で緑と黄色と茶色の色をしているヘビを見つけ、助けを呼んだのです。ところが男性たちが助けに来ると、ヘビはどこにも見当たりませんでした。

しばらくしてマリアと彼女の息子が到着し、ゲストルームに通されました。疲れ果てていたマリアは眠りにつきました。

次の日、安息日の朝、教会の長老が敷地内にある教会でマリアにオリーブ油を塗り癒やしの祈りをすると、マリアは意識を失い、床に倒れてしまいました。意識が戻ったとき、マリアは混乱状態で、体の痛みを訴えました。ギニアのアドベンチスト教団総務局長と財務のミシェル・ギラヴォギは彼女を休ませるため、ゲストルームに運びました。

彼女が寝ていると、緑と黄色と茶色の色をした

ヘビが彼女の部屋の窓を通り、壁にあった穴に入り、部屋の中へ入ろうと入り口を探していました。マンゴーの木で見つかったあのヘビでした。教会員がその1メートルほどあるヘビに気がつき、助けを呼びました。

窓の外に人が集まり、ヘビを穴の外におびき寄せようとしていました。そのうちのひとりが、木の棒の先にガソリンに浸したビニールを付け、たいまつのようなものを作って火を付けました。彼がその火の付いた棒を穴に差し込むと、ヘビは外に出てきて地面に落ち、のたうちまわりました。ミシェルはすぐにヘビに飛び乗って踏みつけ、頭を潰しました。

その数時間後、マリアの携帯電話が鳴り、見ると知らない番号からの着信でした。マリアは電話を取るのを恐れましたが、同じ番号から何度もかかってきました。

「かけ続けるということは、何か大事なことなのかもしれないから電話を取ったほうがいい」と教会の友人は言いました。

電話をかけていたのはマリアの妹のハジャでした。「あなたに時間をかけて体を治せるということを持たねえでかかったの。もう大丈夫。きっと良くなるわ」彼女は言いました。

「なぜそんなことを言うの？」とマリアは聞きました。

「よく聞いて。救急車の音、聞こえる？」ハジャは言いました。

「救急車？ 一体何があったの？ お母さんに何かあったの？」とマリアが聞くと、「違うの、お母さんじゃないの」とハジャは言いました。「ナイジェリアの呪術師がうちの2階から落ちて、頭から落ちたために即死だったのよ。頭蓋骨が砕けてしまったの」

そして翌日からマリアの体の傷は消え始めたのです。

マリアはイエスさまのために全てを捨てました。立派な家や成功を納めていた店、2台の車に居心地の良い暮らし。母親は今でも彼女の命を狙っているため、彼女とマークは隠れて生活をしています。しかし彼女のイエスさまに対する愛は強く、

宣教師になるためにお祈りをしています。

「わたしと同じギニア人たちがクリスチャンになるのを見るのが私の夢です」と彼女は言います。

「彼らにイエスさまのことを伝えたい。この真実をわたしだけに留めておくことなどできません。この良き知らせをこの国の皆に伝えなければならないのです」

ギニアや西中央アフリカ支部での福音宣教において、セブンスデー・アドベンチスト教会は非常に大きな課題に直面しています。マリアやマークのような人々を、今日の 13 回献金によって助けることができます。今回の献金の一部は、マークをいつの日か学ばせたいとマリアが願う、ギニア・コナクリにあるコバヤ・アカデミーの建設資金として用いられます。皆さまの献金は、リベリアの学校建設、またナイジェリアの病院建設にも用いられます。皆さまが、マリアやマーク、そして西中央アフリカ支部でのアドベンチストの働きを覚え、お祈りくださることを感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ・ナレーターは物語を覚える必要はありませんが、ただ読むというのを避けるために、内容をよく把握してください。
- ・アドベンチスト・ミッションはマリアの安全確保のため、本名は公表していません。写真は彼女の息子のマークです。妹のハジャという名前も偽名です。
- ・Hadjia はハジャと発音します。
- ・Gbale はグボーリーと発音します。
- ・マリアについてはひとつ前のお話でも読むことができます。
- ・写真は以下からダウンロードできます：
Facebook(bit.ly/fb-mq) または、ADAMS databank(bit.ly/maria-in-guinea).
- ・13回安息日プロジェクトの写真は以下よりダウンロードできます：bit.ly/WAD-2020